

# 中洞牧場の実態記録

中洞 正\*

## 1. 中洞牧場の概要

筆者は1977年東京農業大学を卒業して以後一貫して山地酪農を行ってきた。卒業7年後、岩手県岩泉町の現在地に入植し今年で27年が経過した。

山地酪農とは1940年代植物学者である猶原恭爾博士によって提唱された山地を利用した放牧酪農である。筆者はその山地酪農に牛乳・乳製品製造プラントの設計建設・商品開発・販売を取り入れた「中洞式山地酪農」を確立した。

牧場の面積はシバ放牧地16ha、林間放牧地約25ha、採草地5ha、その他約4haに育成・去勢牛含め70頭を飼育している。

特に最近の牧場のテーマは林間放牧地を活用した「森林共生型酪農」である。日本の森林は戦後国策で行われて「拡大造林事業」で森林面積の40%が

針葉樹化した。その後の木材の自由化で木材価格が暴落し植林された針葉樹は全国各地で放置され、様々な弊害が露呈している。

牛を放牧することによって森林を管理するというのが当牧場の狙いである。特に森林管理で最も重要な下草刈りを牛の採食で行うという手法は古くは「混牧林」「林間放牧」と呼ばれ馬や役牛の放牧で行われていた歴史がある。これを乳牛で復活させようというわけである。

また、牧場から生産された牛乳を加工処理する乳処理プラントの設計・工事・製品開発・販売まで行い、この業界の川上から川下まで一貫するノウハウを有しており新たに牧場内に乳処理プラントを建設していた。まさにその工事の最中に震災に襲われたのである。このプラントでは市乳、ヨーグルト、バター、アイスクリーム、チーズの製造を行うラインを著者が設計して、配管工事は牧場スタッフで行い6月末には完成した。

## 2. 被災地で伯母を探す

3月11日の震災の時、東京出張中だった著者は、テレビで地元が壊滅したことを知り急いで東京駅に向かったが岩手に戻るすべがなく一晩駅で過ごした。3日後に唯一残されたルートである日本海側の道を使って埼玉に住む従姉の車で従姉とともに



写真1 放牧地で草をはむ



写真2 雪上で過ごす親子

\* 山形山地酪農研究所代表取締役所長・農業生産法人鶴企業農業研究所・中洞牧場長(Tadashi Nakahora)

岩手まで向かった。埼玉、群馬、新潟、秋田を経由して15時間かけとりあえず連絡の取れない母親を実家に訪ね無事を確認した。

従姉の母親である伯母はテレビで町が壊滅したと何回も放映されていた宮古市田老町に住んでいたのでことさらに心配である。牧場のスタッフが津波で壊滅した田老町へ行き安否を聞いて廻り、生きているらしいとの情報は辛うじて通じた携帯で得られていた。しかしその確証は全くなく生きていてもどこにいるかも定かでない。

ただちに実家から4km離れた田老町へ向かった。車で走ればたった5分程度の距離である。田老町の市街地の壊滅的な現場はテレビでは何回か見てはいたが実際に目の当たりにして従姉とともに呆然と立ちすくんでしまった。しかし伯母の無事を確認するまでは感傷にひたっている暇はない。瓦礫の中に辛うじてあいた道を車で避難所である寺に向かった。途中から道も瓦礫に覆われたままで歩くこともできなくなった。高台を走る鉄道の線路が唯一残された道であった。

傾斜のきつい側面に地元の人が垂らしたと思われる太いロープが垂れ下がっていた。そのロープを使い線路の上まで這い上がった。そこは既に避難所である寺までの道として多くの人たちが往来していた。海面から10m以上の高さはあると思われる線路の上にも民家の屋根が漂着しており津波の恐ろしさを再び実感した。その後、伯母は寺にはいなく、地元の高校に避難したと聞き再度線路を歩き高校へ向かったがそこにもいなかった。まさか、という不安にかられた。

避難所である高校の体育館の入り口には生存確認者の一覧が掲載されていた。受験生が合格発表を見るような気持でその一覧表を隅から隅まで探した。「あった！」まさに合格発表である。この時初めて確実な情報として生存が確認できたのである。しかしながらまだこの目での生存は確認できていない。その場で老人ホームに避難したという情報を得て、すぐに筆者の親戚が理事長をしている老人ホームに向かった。理事長は会うなり「いるよ」と言ってくれた。伯母とはここで会うことができ、すこぶる元気であった。「足もとまで津波がきて間一髪だった」と言っていた。

その後伯母の末娘の行方が分からず、方々探した

が未だに不明である。亡骸のないまま3カ月以上たった後の7月18日に葬儀が行われた。

田老の町は筆者の生家から4kmしか離れておらず子供のころからよく遊びや買い物に行っていた町である。知り合いや馴染みの店も多くあった。それが一瞬にして瓦礫の山となったのである。今では田老の町は瓦礫も片付、数件残っている鉄筋コンクリート建ての建築物があるのみである。建物のない町のその空間には雑草が生えはじめている。この津波の猛威とともに廃墟となった町もたちまち雑草が生えるという自然の力を目の当たりにして複雑な気持ちである。この街は雑草で覆われたジャングルになる可能性も全くないとは言えない。この街が本当に復興するのかどうか疑問と不安でいっぱいである。

### 3. 牧場の様子

この項と次の4. 停電については牧場にいたスタッフからの聞き書きである。牧場は岩手県の北上山地標高700~800mにあり津波の影響は全くない。地震では牧場も大きく揺れてはいたが、人や牛・建物・放牧地に被害はなかった。しかし、地震で揺れている時に山で草を食べていた牛達が地震に驚き群れで駆け下りてきたという。牧場内に作った炭焼き小屋で作業していた炭焼き職人はその牛達の異常な行動に驚き、牛達を避けながら大回りをして牛舎まで戻ってきたという。3月はまだ寒く数頭の子牛が牛舎内にいたが、地震の時は山にいた親牛が叫びながら牛舎にきたり、また戻ったりを繰り返していたという。別の放牧地にいた牛達は驚いて電気牧柵をくぐり抜け川を駆け上って行った。年末年始の大雪で唯一自由に動ける空間が放牧地のそばを流れる川であった。

### 4. 停電

14時46分の地震発生からまもなく、牧場も停電し、電話もつながらなくなった。停電に対して、スタッフ達はとくに混乱や不安になることは無かった。というのは、昨年の暮れから、元旦にかけて地元住民も経験したことが無いような大雪が降り、その時も3日間停電したのだ。その経験があったので、ろうそく、懐中電灯、ラジオ、乾電池などもある程度備えてあった、他にも前回の大雪による停電後、非常時

用にも使えるよう自家発電機も牧場に導入していた。備えがあったおかげで、冷静に対応することができた。

それでも、一番困ったことはやはりミルクカーが動かないことだった。放牧牛の為、一般の酪農家に比べると乳量は少ないが、毎日の搾乳のリズムが崩れるだけで、乳房炎を起こす牛もいる。ミルクカーが動かなくても、朝晩の搾乳は欠かせないで手搾りをした。乳量の少ない牛は一日一回の手搾り、子牛に授乳中の牛は子牛が残さず乳を吸ってくれているので、搾乳はせずにすんだ。他の酪農家に比べれば、自然放牧、自然哺乳での山地酪農はこういう時、牛も、人もダメージが少ない。

翌、12日携帯電話で、ようやく外部との連絡を取ることができた。とにかく、今何が起きているのか情報を集めることを考え、テレビは衛星放送だったので発電機につないで見ていた。暗い部屋の中、テレビのニュースを見ると、信じられない光景が画面に広がり、日に日に死者、行方不明者が増え、ぞっとするような現実とその時初めて不安を感じた。そして、地震から二日目の夕方、想像していたよりも早く電力が回復。燃料や食料の確保などの不安はあったが、徐々に生活は落ち着いていった。

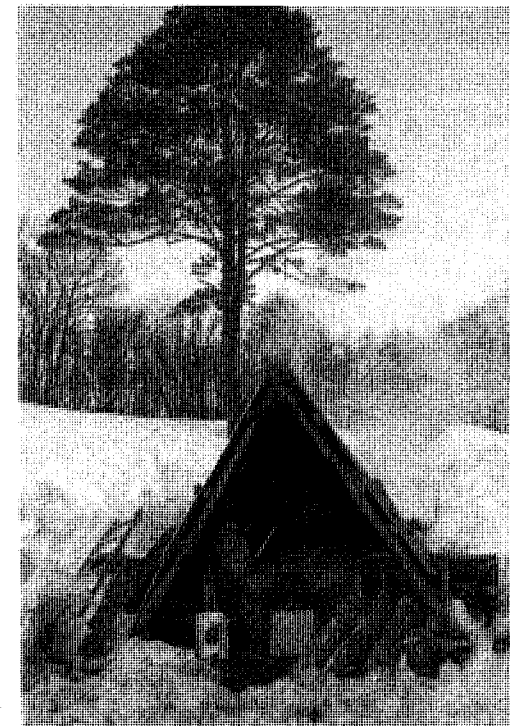


写真3 活躍した炭焼き小屋

### 5. 燃料の確保

車用のガソリン、トラクターの軽油、暖房用の灯油など燃料の買えない日が続いた。普段の生活だったら、お金さえ出さずすれば、いくらでも買えた燃料が入手できないのである。買うことができたとしても、わずか5~10リットルのハイオクのみ。しかも数時間も並んでやっと5リットルしか入手できない日もあった。牧場から最寄のガソリンスタンドまでの往復約50km分ではしかなかった。それでも、毎日いろんなガソリンスタンドに並んだ。2時間半もガソリンスタンドに並んでも全く買えない日もあった。山間部の牧場での唯一の交通手段は車である。それだけ、燃料とは牧場生活にとって無くてはならない存在だった。結局、以前の生活のように、燃料を買うことができるようになったのは、震災から12日経った3月23日だった。その間、東京の協業会社である㈱リンクの社長以下3名が300リットルの軽油をトラックで運び込んでくれ急場を凌ぐことができた。

震災直後、牧場に残っていた燃料は軽油300リットル、ガソリン20リットル、灯油100リットルだった。

軽油は、主に発電機の燃料として使用した。酪農家は何がなんでも、毎日搾乳しなければならない。2010年の年末の大雪では、水道も電気も止まり、手で全頭を搾った。今回はそんな不測の事態を考慮し、発電機を購入していた。おかげで、仕事も生活も何とかカバーすることができた。ただ、「いつまで燃料がない生活が続くのだろう。」という不安な気持ちは拭いきれなかった。

そんな、不安な日々が続く中、唯一の希望と言えれば、「木炭」だった。牧場では、昨年からの芝草地の造成の為、放牧地にある森林の間伐に力を入れている。その間伐した木を、「薪」や「木炭」に変え利用している。その為、震災のあった寒い時期であっても「薪」や「木炭」で暖をとることができ、灯油などの化石燃料がなくても、寒さに悩まされることは無かった。特に、木炭は化石燃料とは違い、少量で長時間利用することができる。夜の20時頃に火を点けた炭が、朝まで残っていたこともある。他にも、やかんで湯を沸かしたり、料理にも使った、そのバリエーションは数限りなかった。

こんな時代だからこそ、今ある生活を今一度、見直す必要がある。特に、燃料に関しては、今回の震災で嫌というほど思い知らされた。いかに化石燃料や電気に依存した生活を送っていたのかと。湯水のごとく浪費する経済システムはこのままでいいのだろうか。

今回の経験から確実に言えることは、日本の文化である“炭”のある生活の有難さ、先人達が構築したこの技が今完全に消え去ろうとしていることは日本民族の大きな損失に繋がるということを痛切に実感した次第である。

日本の国土の67%が森林であり森林占有率では世界で第2位。しかし、この森林が全く活用されることなく木材自給率にいたっては26%という。この無尽蔵に広がる資源こそ、これからの日本を創るキーワードとなるだろう。

## 6. プラント工事の遅延

震災時には、牛乳、ヨーグルト、アイスクリーム等を製造する乳製品製造棟の工事が進んでいた。完成は3月末の予定であった。しかし震災の影響により工事は大幅に遅れ、完成は結局7月末までずれ込んでしまった。

工事が遅れた要因としては、まずガソリン、軽油等の燃料の確保が困難であったということがあげられる。工事関係者が牧場に行くことができず、また重機や作業機械を動かすこともできなかった。また建設資材が調達できない状況が続いたため工事を進めたくても作業をすることができない状況にあったのである。

しかしそのような状況の中でも、牧場の停電が復旧した震災の3日後から工事を再開してくれた業者もあった。5月半ばまでには内装工事がほぼ終わり、その後は牧場のスタッフが生乳を殺菌するためのタンクの搬入や製造棟内の配管工事などの作業を行なった。保健所の検査および完工式直前には、最後の頑張りとはばかりに夜中まで作業を続けた日もあったが、どうにか予定されていた日までには大方の作業を終えることができた。

このような震災の混乱の中でも工事を進めてくださった関係者の方々のおかげで、当初の完成予定を大幅に過ぎたものの7月末に無事、乳製品製造棟は完成を見ることができた。

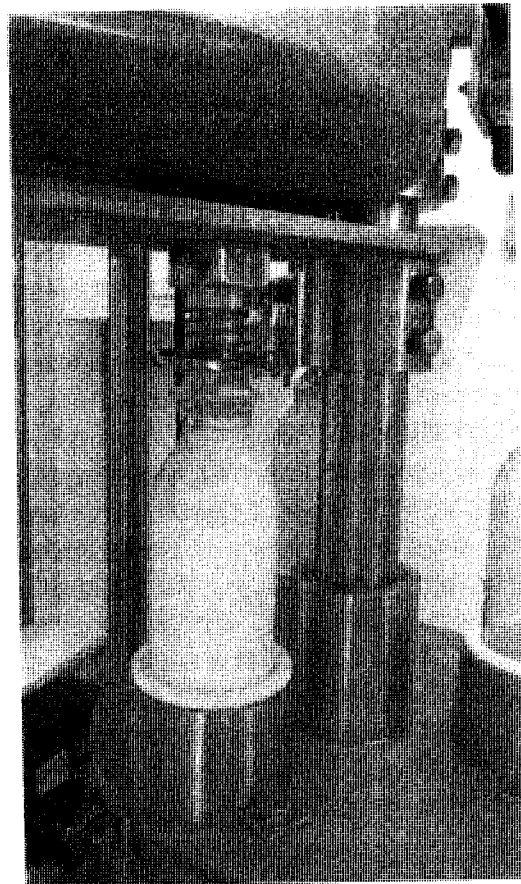


写真4 完成したミルクプラント

## 7. 原発事故対応・岩手県における放射能の実態

過去にも大津波に襲われた岩手県・三陸海岸は行政による相応の対策がとられていたが、惨事は繰り返され東日本大震災でもまたもや大きな津波被害を受けるとともに今回は福島第一原発の事故で大量に放出された放射線物質による被害が重なった。震災廃棄物や牧草、農水産物は放射能に汚染され、住民はもちろん家畜や様々な生物が生きてゆく環境を奪われている。

岩手県では、通常時から文部科学省の委託調査で環境放射能調査を行っており、震災後の測定でも基準値を下回る結果を報告している。農畜産物の放射性物質についても調査しており県内13の乳業施設を対象に実施した原乳の放射性物質の定期的な調査では、食品衛生法上の暫定規制値である300以下を下回る結果であった。

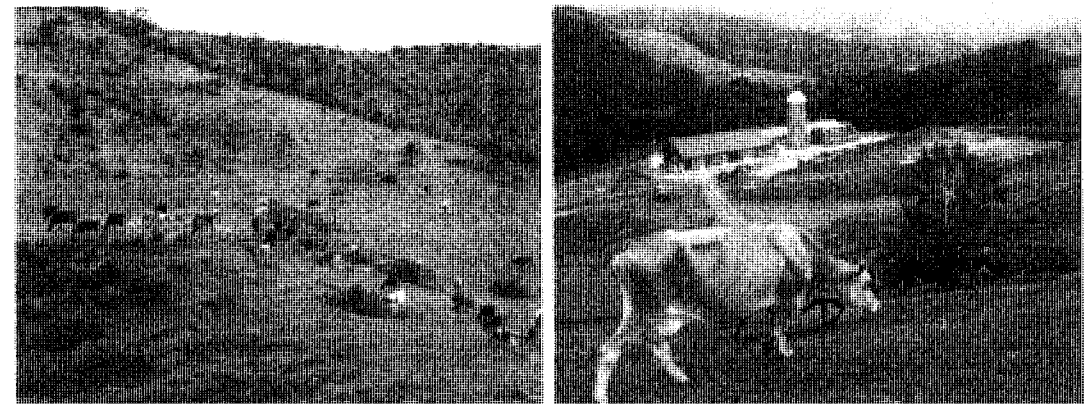


写真5 放牧場では毎日放射線量を測定している

また、放射性セシウムに汚染された稲わらを与えた肉牛が出荷された問題で、行政から全頭検査が求められ、8月1日には出荷停止となったが、政府は25日、福島、岩手、栃木の3県産の肉牛について各県の出荷管理計画に基づき出荷される牛肉に限って出荷停止措置を解除した。

岩手県滝沢村で牧草の汚染(359ベクレル/kg)が検出されたこともあり、現在、牛を出荷するに当たり「全戸検査済み農家証明書」や「牛肉の放射性物質検査結果通知書」の提出が義務づけられている。また今後どこかで検出されれば牛乳や牛肉に対して、どのような出荷制限が出されるか、いつ屠場が閉鎖されるか、不安を抱えながらも命ある牛を扱うということは毎日、欠かすことなく飼育管理を行わなければならない。そうして、大切に育て上げた牛も出荷できない、屠場が閉まってしまえばと畜すできない、また市場に出しても枝肉価格が低迷しているこの状況では肥育農家が子牛を導入する意欲は薄く、買い取り手がいない……。

東電福島原発を起点としてみると、牧草の汚染が検出された岩手県滝沢村まで275kmあり、280km離れた当牧場も決して油断はできない。

## 8. 牧場内での放射能の計測

原発事故による放射能汚染は中洞牧場でも深刻なことだった。群馬県での放牧禁止の通達は山地酪農がなくなってしまうのではないかと心配があった。そのため中洞牧場では放牧の安全性を確かめるためにも自分たちで放射線量の測定をすることにした。

いち早く放射線量を手軽に計測できる機器を入手し、放牧地・採草地・畑・牛舎内とパドックの地表面と地上1m付近を毎日計測している。風向きによる変化も考えられたため牧場内で標高の高い位置にある放牧地では風向・風速も計測している。今のところ基準値を超えるような高い数値は出ておらず震災後も変わらず放牧を続けている。

放射線量を計測できる機器の後からの入手は困難だったらしく、牧場の計測器は岩泉町に貸し出し町内の学校などの計測に役立った。

また、牛が毎日食べている芝や山の草と搾乳した牛乳を専門の研究機関に毎週送りそれに含まれる放射線量も計測の依頼をしているが今のところ核種別分析で1ベクレル/kgを超える数値は出ていない。

## 9. 牧場での放射能対策

また、万が一、放射能汚染で放牧禁止になった場合に備えて経産牛のみの緊急避難場所として簡易牛舎の設置も検討している。簡易牛舎設置に伴い、乾草確保のため北海道の乾草の生産・販売を行っている牧場から乾草を提供してもらうことも検討中である。

今後、放射能による風評被害等も十分に考えられ、独自の調査・実施が重要になってくるものと考えられる。放射能対策に向けて中洞牧場としても独自に調査を続けていき、消費者に安心・安全な製品であるということ自信をもって主張できるような対策を考えていくつもりである。

脱稿に当たり牧場スタッフの松本、水野、江澤、幸山、堀田、川口の各氏が執筆に協力してくれたことに感謝申し上げる。